
領域名 (母性保健看護・助産)

報告者：(下中 壽美)

教育及び実践の課題

日本では揺さぶられっ子症候群：Shaken Baby Syndrome (以下 SBS) 症例は欧米に比較すると少ないと報告されている一方、乳児が泣いている時に父親があやした行動によって引き起こされた SBS の症例報告がある。また、2002 年より母子手帳へ SBS に関する記載が始まっており、SBS についての情報提供がなされている。研究結果は、Perinatal Shaken Baby Syndrome Prevention Program (以下 PSBSPP) が乳児の泣き、その時の親の怒りと SBS について、親の知識を増やし、乳児の泣きに上手く対処するのを助けると評価していた。

日本での母子手帳の記載内容や SBS に関する情報提供を講義で紹介するとともに、SBS だけでなく、乳児の泣きやその対処法について、積極的に親へ情報提供する必要性が感じられた。

活用した論文の概要

Ce'line 等の研究は PSBSPP を評価するために行われている。PSBSPP とは、まず看護師が①生後間もない乳児が泣く理由、②乳児が泣く際生じる親の怒りとその対処戦略、③乳児を振る危険性と SBS について両面印刷された 3 枚のキューカード：Cue cards (以下 CC) を手渡し説明する。そして、24 時間利用可能な親のためのホットラインと情報の理解を確認後、看護師は親に赤ちゃんが絶え間なく泣いたときのアクションプランを考える時間を与え、プランを記載してもらう。最後に、親と看護師がともにサインをするというものである。

研究対象者は、介入を受けた親 263 人と実施した 69 人の看護師である。産後入院中に親は介入を受け、属性の質問紙調査に回答した。退院後 6～9 週間頃、電話インタビューを受けた。看護師は 3 時間のトレーニングを受け介入を実施し、トレーニングの評価や自分が実施した介入の評価に関する質問紙調査に回答した。

結果は、親・看護師両方が肯定的評価を示した。98%の親が介入を良いと評価し、その継続に同意した。また、94%の親は、ナースの説明なしで CC のみでは不十分と回答した。親の半数以上が CC から多く学んだと回答し、子どもを産んだ全ての親へ CC を配付する重要性を強調していた。すべての看護師が、介入が適切であること、継続が重要であることに同意した。介入前のトレーニングに関しては満足の回答が得られた。

教育及び実践への活用

2010 年より、学内の講義、母性保健看護方法Ⅱ (現在の周産期保健看護Ⅱ・周産期保健看護演習) 保健指導パンフレット作成課題に「赤ちゃんが泣くこと」を追加し、そのパンフレットを用いて、ロールプレイによる発表を実施し学生間の共有を図っている。

さらに実習では、受け持ち褥婦への保健指導実施が課題にあり、「赤ちゃんが泣くこと」の保健指導を実施する学生もいる。

参考文献*

Ce'line Goulet, Jean-Yves Frappier, Sylvie Fortin, Line De'ziel, Annie Lampron, and Maryse Boulanger (2009) : Development and Evaluation of a Shaken Baby Syndrome Prevention Program : Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing ,38(1),7-21.
